

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 学 術 ）	氏名	尹 帥
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>日本語学習者の語彙認知における超分節音素の役割 —視線計測を用いた検討—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教授 畑佐 由紀子</p> <p>審査委員 教授 宮谷 真人</p> <p>審査委員 教授 川合 紀宗</p> <p>審査委員 教授 酒井 弘（早稲田大学理工学院英語教育センター）</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文では、強さ・高さ・長さといった複数の音素にまたがって実現される超分節音素の語彙認知における役割について、日本語のピッチを対象に検討した。具体的には、ピッチの変化は単語の一部が入力された時点で知覚可能であるため、これが「逐次的」に処理されるのか、それとも、一定の韻律的単位が構成されるのを待って「遅延的」に処理されるのかを、日本語母語話者、中国人日本語学習者、そして韓国人日本語学習者を対象として、以下の課題を設けて、実験的に検証した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 日本語母語話者の語彙認知において、超分節音素の一つであるアクセント情報は逐次的に使用されるのか。 2. 中国語（普通話）及び韓国語（ソウル方言）を母語とする学習者は、語彙認知においてアクセント情報を逐次的に使用することができるのか。 3. 学習者の語彙認知におけるアクセント情報の使用に母語の影響が認められるのか。 <p>第1章において研究の対象と目的を明確にした後、第2章でL1及びL2の語彙認知における超分節音素の役割を概観し、先行研究のまとめと問題点を指摘し、本論文の研究課題について述べた。第3章では、本論文の基軸となる日本語母語話者を対象とした実験（実験1）の結果を報告し、実験1の改善点と実験方法の詳細を説明した。第4章では、中国語（普通話）を母語とする日本語学習者を対象とした実験（実験2）の結果を、第5章では、韓国語（ソウル方言）を母語とする日本語学習者を対象とした実験（実験3）の結果を報告した。第6章では、第5章までの結果に基づいて日・中・韓母語話者の比較からL2語彙認知における超分節音素の役割について考察し、学習者のL1における超分節音素の影響について考察した。第7章では、本論文全体をまとめて、言語教育への示唆及び今後の展望を述べた。</p> <p>本論文では研究方法として、実験参加者に3モーラで構成される疑似語とそれを表す絵のペアを学習させた後、聴覚呈示された疑似語を表す絵を選択する再認題を課し、聴覚呈示から語彙選択までの過程を、視覚世界視線計測パラダイムを用いて、測定した。</p>			

日本語母語話者を対象とした実験1では、母語話者は日本語の語彙認知において、語彙刺激の2モーラ目を聴取した後に逐次的に語彙認知を開始するというこれまでに明らかにされていなかった事実が明らかになった。また、視覚世界パラダイムと視線計測の実験方法は、日本語の語彙認知の手掛かりを探る上で、適切で有効な方法であることを確認した。実験2では母語に音節内にピッチの高低変化を有する中国人日本語学習者を対象とし、同様の実験を行った。その結果、中国人日本語学習者は2モーラ目で語彙認知を行っており、ピッチが逐次的に処理されていることが分かった。

実験3では、ピッチ変化が弁別的でない韓国語（ソウル方言）を母語とする日本語学習者を対象として、実験を行った。その結果、韓国語話者は3モーラ目で語彙認知を始める傾向が顕著にみられた。

本論文によって第一言語及び第二言語の語彙認知における超分節音素の役割について以下の点が明らかになった。

I. 第一言語における語彙認知

1. ピッチ高低変化が語彙の識別の手掛かりとなる場合、超分節音素としてのアクセント情報が逐次的に使用され、超分節音素が聴取されたタイミングで語彙認知が行われる。すなわち、超分節音素は単語レベルの語彙認知において、分節音素と同様に逐次的に利用される。
2. アクセント情報を構成しない単なる基本周波数の相違は、語彙の識別の手掛かりとして直接使用されない。

II. 第二言語における語彙認知

1. 学習者の母語の韻律的特徴、すなわち、超分節音素の役割の相違が、第二言語である日本語の語彙認知における超分節音素の逐次的な使用に影響を及ぼす。
2. このような母語の相違による影響は、第二言語の学習歴及び熟達度に関わらず、第二言語を認知する際の一貫して観察される。

本論文は、これまでのストレス言語を実験材料とした研究とは異なり、超分節音素のみ異なるミニマルペアが数多く存在する日本語の母語話者と学習者を対象に、L1及びL2の語彙認知において韻律的特徴が逐次的・非逐次的に用いられているのかを確かめた点で、新奇性に富む意欲的な論文である。また、異なる言語を母語とする学習者を対象とした本論文の結果から、母語の語彙認知に使用される能力はL2語彙認知に影響を与えるという知見が得られた。L2の学習歴及び熟達度に関わらず、学習者の語彙認知に母語の韻律的特徴の影響が観察されたことから、L1とL2における超分節音素の処理能力には緊密な結びつきがあることを明らかにした点でも意義深い。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 28年 2月 19日